



写真-1 的形港（令和4年4月撮影）

■ 行基が開いたとされる「摂播五泊」の一つ・韓泊

写真-1 は、的形川河口付近の左岸堤防上から姫路港・的形地区（以下「的形港」という）を撮ったものです。

天平年間（729～749）に僧行基が開いたと伝えられる「摂播五泊（せっぱんごはく：櫻生泊、韓泊、魚住泊、大輪田泊、河尻泊）」の一つ、韓泊（からのとまり）があった場所は、この的形港なのか、それとも約 1km 西の姫路港・福泊（ふくとまり）地区（以下「福泊港」という）なのか、明確にはなっていません。ただ、地形的要素や伝承を勘案するとの形説が妥当なように思います。

ここでは、『日本大百科全書』に記載の「韓泊は的形港付近にあったが、その後湾奥の土砂堆積が進んだために福泊港に移行した」との説をベースに稿を進めます。



写真-2 福泊港

■ 的形港と行基

奈良時代、都と九州を結ぶ主要な交通路の一つが瀬戸内海航路でしたが、冬の西風などにより難破する船が相次ぎ、そのために朝廷は、船で 1 日の航程の間隔を空けて船泊を造りました。

行基が的形の地を開いたという韓泊は、西風を遮ることができるように岬の陰になった所が選定されています。行基が開いたことを裏付けるように、的形港周辺には行基が上陸したとの伝承がある「行基が鼻」や行基の開基した寺と伝えられる海嶽寺（かいがくじ）があります。

① 行基が鼻

的形川河口の西にある礧山（いそやま）の南端に突き出た所が「行基が鼻」と呼ばれていて、地元の「的形ふるさと里山会」が立てた説明板には右記のように記されています。

冬の西風を遮るためには格好の地形で、船から泊の候補地を探していた行基がここに上陸したのは納得できます。

行基が鼻
 ここ礧山の南端。奈良時代の高僧・行基が上陸した地点との伝説がある。
 海岸まで山が突き出ていて、先端は波止場になっている。
 的形ふるさと里山会



写真-3 礧山の先端部が行基が鼻



写真-4 行基が鼻の先端部

② 海嶽寺

写真-5・6 は、天平年間に行基が開基したと伝えられる海嶽寺です。臨済宗の禅宗寺院で、一時期荒れていましたが、中世に紀州の無及禅師が中興し、江戸時代に現在地に再興されたそうです。

向山の北側中腹にあり、長い石段の上に鐘楼門があります。本堂にお参りするためには全部で 127 段の階段を上がらなければなりません。



写真-5 海嶽寺の長い石段



写真-6 行基開基の伝承をもつ海嶽寺

■ 貧乏岩

的形川（法定外河川）に設けられた的形水門の近くに「貧乏岩」（写真-7）があります。

名前の由来は右の現地説明板のとおりですが、出入りする船が、この岩に接触して船を壊すことがあったことから、昔はこの岩が海面下に没するほど海面が高かったようです。

的形ふるさと里山会

昔、的形全域が入江で海面はもっと高く、出入りする船は必ずここを通り、この海底から突き出た岩で船を壊し貧乏したと伝えられる。

貧乏岩



写真-7 貧乏岩

■ 土砂堆積が進行したため、泊地を的形から福泊へ移行

前述のとおり、的形港湾奥の土砂堆積が進んだために韓泊の機能を福泊に移行したようです。

正応 5（1292）年頃、律宗の僧・行円房顕尊（ぎょうえんぼうけんそん）が福泊島勸進上人^{※1}（かんじんしょうにん）となり、風浪を防ぐための島の修築事業を進めるため、往來の船から 1 艘あたり 200 文から 300 文の津料を徴収しています。

また、『峯相記^{※2}（みねあいき）』によると、顕尊が正安 2（1300）年に入滅した後、その檀那であった得宗被官・安東蓮聖^{※3}（れんしょう）が事業を引き継ぎ、数百貫の銭を投じて 2 町（≒218m）ばかり沖合に大石を積み上げて人工の島（福泊島）を築き、乾元元（1302）年築港工事を完成させています。

以後、福泊港は商人や海運業者の家・倉庫が建ち並び港は繁栄しましたが、南北朝期（1337～1392）に加古川河口に堆積していた砂が波に吹き寄せられて福泊港の内を埋めたため、福泊港は次第に衰退していったとか。

※1 勸進上人：各地を遍歴しながら説法を行い、人々から銭や米の寄付を受ける僧侶をいう。彼らは必要経費のみをそこから受け取り、残りを事業達成のための寄付に充てた。

※2 峯相記：鎌倉・南北朝時代の播磨国の地誌。作者は不明だが、1348 年に播磨国の峯相山（ほうそうざん）鶏足（けいそく）寺（現・姫路市）に参詣した旅の僧が、同寺の僧から聞き書きをしたという形式で記述される。鎌倉・南北朝期の社会を知るうえで貴重な史料。

※3 安東蓮聖：鎌倉時代中期から末期にかけての武士。北条氏得宗家被官である御内人（みうちびと）。摂津国・和泉国を中心とした瀬戸内海沿岸一帯に所領をもち、主に西国の得宗領の管理や海運・金融に携わった。嘉暦 4（1329）年、京五条の私邸にて 91 歳で死去した。

■ 行基が開眼供養したという八家地蔵

福泊のバス停前に神功皇后伝承を有する福泊神社があります（写真-8）。室町・戦国時代の建築といわれる本殿は、姫路市内に残る数少ない一間社隅木入春日造で、姫路市の指定文化財になっています。ここから 500m 南に行くと福泊港に出ますが、その突端に「八家（やか）地蔵」があります（写真-9）。

高さ 1.9m の大きな地蔵半跏像で、総御影石製の珍しいものです。鎌倉時代の作とされていて、『姫路市史』では六甲南麓で活躍した伊派の名工・行恒の作ではないかとされています。

奈良時代、大亀に乗って海中より現れ、この地を訪れた行基が安置し開眼供養したとか。白井元貞著『木庭記』には、乾元元（1302）年、安東蓮聖が福泊港を整備した時、木場にあったこの像を港の繁栄を願って移転させたと記されています。

江戸時代後期の享和 3（1803）年版の『播州名所巡覧図絵』では、露地の地蔵を訪れる参詣客や塩田風景が描かれています。



写真-8 福泊神社



写真-9 八家地蔵



図-1 姫路港的形地区から福泊地区周辺の地図

■ 頼山陽が命名したと言われている「小赤壁」

福泊港から八家川河口にかけての海岸には、長さ 800mにわたって海食崖が連なり、灯籠地山、姫御前山、木庭山の奇岩巨石が海に迫る絶景の景勝地です。

文政 8 (1825) 年、姫路藩家老・河合寸翁 (すんのう) が創立した仁寿山校に招かれた頼山陽は、月夜に舟を浮かべてここに一夕の清遊をこころみ、中国・武漢の名勝地「赤壁※⁴」になぞらえて、この岸壁を「小赤壁」と命名したと言われています。

小赤壁の岩石は、白亜紀後期 (およそ 7000 万年前) の激しい火山活動でできた溶結凝灰岩です。また数ヶ所で、その下にある丹波帯の堆積岩 (およそ 2 億年前) が見られます。



写真-10 福泊港の防波堤から小赤壁を望む

また、岩壁は波の侵食作用によりできた海食崖です。海岸の岩壁の下部は波によって削られ、下部がくぼむと、やがて上部が崩れ落ちて崖がつけられます。海食崖の前面には波食棚 (はしょくだな) と呼ばれる波食地形が広がっています。潮間帯にあるほぼ平坦な岩棚で、大潮の干潮時には陸上に現れます。



写真-11 小赤壁

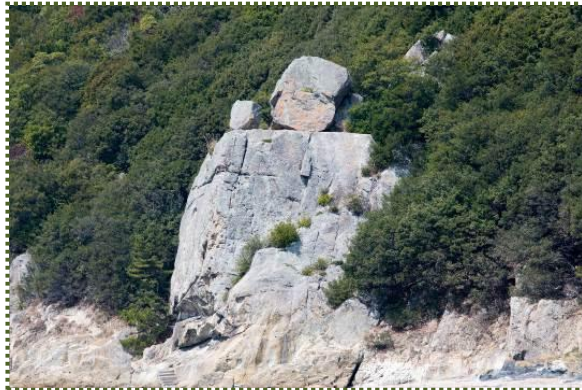


写真-12 小赤壁の巨岩

※4 赤壁：中国湖北省を流れる長江の支流・漢水沿いにあったという崖に挟まれた名勝地で、中国後漢末期の208年、曹操軍と孫権・劉備連合軍の間に起きた「赤壁の戦い」の舞台になった地である。『三国志』の山場である「赤壁の戦い」を題材としたジョン・ウー監督の中国映画『レッドクリフ』が平成20（2008）年に公開されている。

■ モノローグ

「小赤壁」という海食崖があることは以前から知っていましたが行く機会がなく、今回福泊港に隣接しているということで、小赤壁を撮った後、ちょっと足を延ばして小赤壁の上にある展望台にも行ってきました。約40台分の駐車場があり、展望台周辺には広場もあって、写真-14のように瀬戸内海を一望できます。気持ちよくて、蕪村の下記の句を思い出しました。ちょうど桜が満開だったので数組が花見をしていました。

春の海 ひねもすのたり のたりかな



写真-13 小赤壁展望台周辺で花見



写真-14 小赤壁展望台付近から瀬戸内海を望む

カワウとウミウ

写真-14の鳥は小赤壁近くの岩場で休憩中のカワウ（多分）を撮ったもの。カワウとウミウの見分け方は、海にいるからウミウとは限らず、顔の口角の黄色い部分の形やほっぺの白い部分、あるいは体のテカリ具合などで見分けられるらしいが難しい。因みに長良川の鵜飼いはウミウを使っている。

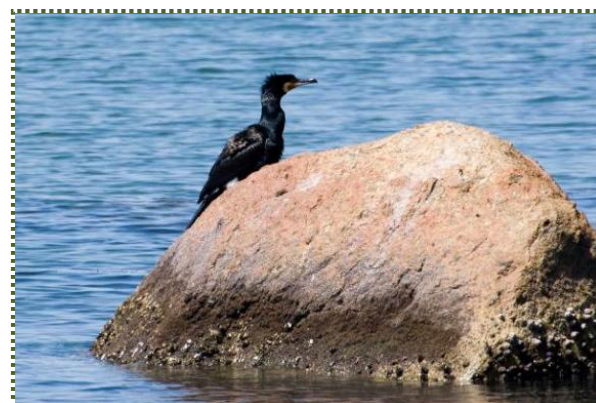


写真-15 小赤壁近くの岩場で休憩中のカワウ（?）

【参考資料】

- 1 『福泊、峯相記、波食棚』 百科事典マイペディア、日本大百科全書、世界大百科事典
- 2 『的形地区をたずねて～文化財見学シリーズ 67』 姫路市教育委員会文化財課 平成 23 年 9 月
- 3 『福泊神社』 兵庫県神社庁 HP
<https://www.hyogo-jinjacho.com/data/6316253.html>
- 4 『播磨史ちいさな旅』 橘川真一 平成 20 年 2 月
- 5 『勸進、安東蓮聖、南北朝時代、赤壁、赤壁の戦い』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 6 『小赤壁』 岩石地質探訪 HP
<https://www2u.biglobe.ne.jp/~HASSHI/syosekiheki.html>
- 7 『ウミウとカワウの見分け方』 コトリパストリ HP
<https://kotori-pastry.com/umi-u-kawau/3422/>

※発行：令和 4（2011）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.153

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.153